



Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

卒業研究抄録集(看護学科) (2018.12) 平成30年度:15-16.

看護学生の看護援助における高齢者への言葉掛けに対して高齢者に抱く認識が与える影響-高齢者を受け持った経験のある看護学生へのアンケート調査を用いて-

川原田 知美, 佐藤 真菜, フェアーウェザー未加

看護学生の看護援助における高齢者への言葉掛けに対して 高齢者に抱く認識が与える影響—高齢者を受け持った経験 のある看護学生へのアンケート調査を用いて—

川原田知美 佐藤真菜 フェアウェザー未加

(指導：神成陽子)

緒言

超高齢社会となっている今、高齢者看護はますます重要になっている。以前より、「高齢者は無力で依存的である」とのステレオタイプに基づいた思い込みのため、高齢者とのコミュニケーションにおいてかかわる側に生じさせる過剰な発話や行動の調節がパトロナイジングコミュニケーション(patronizing communication)と呼ばれ、問題視されている。

看護者として対象者を尊重し、行動することは重要である。将来高齢者を看護する看護学生には、高齢者に対する見方、認識に偏見がないことが求められるが、清水¹⁾は、看護学生の高齢者との対話の特徴として、かかわりへの偏見ともいえる印象を抱いていることを述べている。また高谷²⁾は、食後の言葉かけやナースコールの対応場面において、敬語使用の認識に患者と看護師で違いがある実態を述べている。

本研究では、臨地看護学実習で高齢者の受け持ち経験がある看護学生を対象とし、看護援助における高齢者に対する言葉掛けへ高齢者に抱く認識が及ぼす影響を明らかにすることを目的とする。

方法

研究対象：臨地看護学実習で高齢者を受け持った経験のある看護学科4年生と3年生

調査内容：先行研究^{3)~8)}を参考に無記名自記式質問紙を作成した。構成は①看護学生の高齢者に対する言葉掛け[いつも大きな声で話すか否か、いつもゆっくりと話すか否か、いつも短く簡単な文章で話すか否か、言葉遣い]を目的変数、②看護学生の属性③高齢者に対する認識(19項目)を説明変数とした(図1)。③は先行研究^{3)~6)}を参考に、最も否定的な認識に評点1、最も肯定的な認識に評点5を置き数量化する。

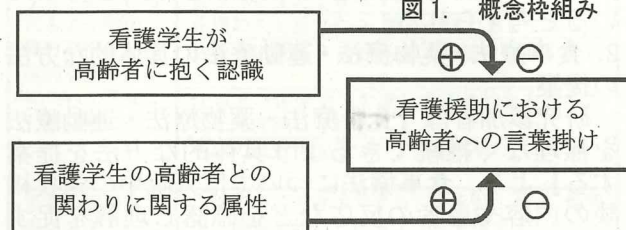
データ収集方法：2018年8月~10月に留め置き法で実施した。

データ分析方法：高齢者への言葉掛けの各項目について「いつも～話す」「友達口調で話す」をパトロナイジングコミュニケーションとなる可能性が高い、「いつも～話さない」「敬語で話す」をパトロナイジングコミュニケーションとなる可能性が低い2群に分け、高齢者に対する認識については Mann-Whitney のU検定、看護学生の属

性の各項目については χ^2 検定を行った。

SPSS(Ver. 22)を用い、有意水準は5%とした。

図1. 概念枠組み



倫理的配慮：対象者には、目的および方法、研究参加は自由意思であること、匿名性の確保・データの取り扱い方法を書面及び口頭によって説明し、質問紙の回収をもって同意を得た。

結果・考察

配布数97名に対し、回収数は68名(70.1%)であり、そのうち①看護学生の高齢者に対する言葉掛けと②看護学生の属性において68名(有効回答率100.0%)、③高齢者に対する認識において64名(同94.1%)の回答を分析対象とした。

1. 高齢者への言葉掛け[いつも大きな声で話すか]と高齢者に対する認識

大きな声で話すようにしている対象20名(31.25%)を大きな声で話す群、大きな声で話さないが、状況に応じて大きな声で話すようにしている、あるいは大きな声で話さない対象44名(68.75%)を大きな声で話さない群とした。

高齢者の認識「話しやすい—話しにくい」と「いつも大きな声で話すか」の項目について、大きな声で話す群の中央値3.5、大きな声で話さない群の中央値4.0であり、2群間に有意差($p<.05$)があった。この結果から、高齢者に対し「話しやすさ」において肯定的認識がある場合、高齢者に対していつも大きな声で話さない傾向にあると考えられる。

また大きな声で話す群と話さない群との間には「高齢者と話す機会の有無」の項目において、その割合に有意差がみられた(表1)。この結果から、大きな声で話さない群は大きな話す群に比べて、高齢者と話す機会がある人の割合が高いことがわかる。吉田ら⁹⁾は、高齢者と話す機会が多い学生は、少ない学生よりも、老人イメージを身体的要素、精神的要素ともに、肯定的に捉える傾向を示すと述べている。これらのことより、大きな声で話さない群の方が「話しやすさ」において評

点の中央値が高かった結果は、高齢者と話す機会の中で、常に大きな声で話さなくても通常通り会話できる方がいるという経験をしているためではないかと推測する。

表 1 言葉がけ[大きな声で話す]と高齢者と話す機会

	高齢者と話す機会		χ^2 検定
	あり	なし	
大きな声で話す群 (n=20)	12 (60.0%)	8 (40.0%)	p<.05
大きな声で話さない群 (n=48)	42 (87.5%)	6 (12.5%)	

高齢者の認識「有能な—無能な」の項目では、大きな声で話す群の中央値 3.0、大きな声で話さない群の中央値 4.0 であり、有意差(p<.05)があった。

この結果から、高齢者に対し「有能な」の項目において否定的認識がある場合、高齢者に対していつも大きな声で話す傾向にあると考えられる。これは、高齢者の能力の評価が、高齢者への言葉掛けの際、声の大きさを過剰に調節するパトロナイジングコミュニケーションに関連していると推測する。

2. 高齢者への言葉掛け[言葉遣い]と高齢者に対する認識

高齢者へ友達口調で話している対象は2名と少数であった。状況に応じて友達口調で話すこともある対象25名を合わせた計27名(42.2%)を友達口調群、敬語で話している対象37名(57.8%)を敬語群とし、その特徴を検証した。

高齢者の認識「動きがはやい—動きがゆっくり」と高齢者に対する言葉遣いの項目について、2群間に有意差(p<.05)があった。両群ともに中央値は2.0と否定的認識を示す得点であったが、敬語群に比べて友達口調群のほうが得点の低いほうに広がっていた(図2)。

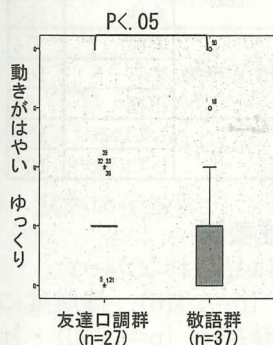
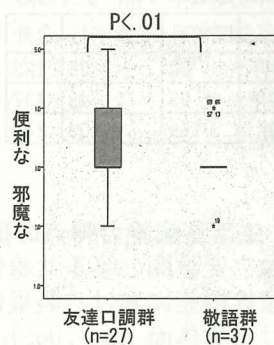


図2 高齢者に対する
[動きがはやい—
ゆっくり]認識



Mann-Whitney の U 検定
図3 高齢者に対する
[「便利な—邪魔な」認識

この結果は、看護学生は高齢者が老化に伴い身体機能が徐々に衰えるという印象を持っていることを示している。また「動きがはやい—動きがゆっくり」の項目において、より否定的認識がある場合、高齢者に対して友達口調で話す傾向にあ

ると考えられる。この項目は、高齢者の身体的能力に関する認識といえることから、パトロナイジングコミュニケーションにも関連があると推測する。

高齢者の認識「便利な—邪魔な」の項目について、2群間に有意差(p<.01)があった。中央値は3.0と同じであったが、敬語群に比べて友達口調で話す群は得点の高い肯定的認識のほうに広がっていた(図3)。

この結果から、高齢者に対し「便利な—邪魔な」において肯定的認識がある場合、高齢者に対して友達口調で話す傾向にあると考えられる。「便利な」は、いてくれると助かるという認識、「邪魔な」は、いなくてもよいという認識につながっている。つまり、高齢者に対する「便利な」という認識は、高齢者と何らかの良い関わりがあり、親しみがあることが推測される。このことは敬語群に比べ友達口調群の方が肯定的に認識していることに関連していると考えられる。敬語群37名のうち15名は、敬語で話す理由を「あくまで患者—看護師の関係であり、親しくなりすぎないよう一定の距離をとるため」と回答している(表2)。

表2 敬語で話す理由《複数回答》 (n=37)

①高齢者は人生の先輩であり、敬うべきであるから	34名
②高齢者に限らず、患者に対して敬語を使うのはマナーであるから	36名
③あくまで患者—看護師関係であり、親しくなりすぎないよう一定の距離をとるため	15名
④特に理由はない	0名
⑤その他	1名

本研究では、高齢者への言葉掛けへ及ぼす影響として高齢者に親しみがあるという認識については調査していないため、今後検証する必要があると考える。

謝辞

本研究にご協力頂いた対象者の皆様、関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

引用文献

- 清水裕子 (2007) : 看護学生の老年者との対話の問題と特徴, 日本老年看護学会誌, 11 (2) : 56-63.
- 高谷琴, 大崎智美 (2015) : 当病棟における看護師の敬語使用の実態と患者が望む言葉遣い, 北見赤十字病院誌, 2 (1) : 6-10.
- 大谷英子, 松木光子 (1995) : 老人イメージと形成要因に関する調査研究 (1) 大学生の老人イメージと生活経験の関連, 日本看護研究学会雑誌, 18 (4) : 25-38.
- 高橋一公 (2013) : 大学生の老人イメージ測定の試み—自己老人イメージのSD法とテキストマイニングによる分析を通して—, 東京未来大学紀要 (6) : 85-94.
- 竹田恵子, 太湯好子 (2002) : 中学生の老人イメージとその形成に関連する要因, 川崎医療福祉大学誌, 12 (1) : 161-167.
- 多田敏子 (1996) : 老人看護学における臨地実習による看護学生の高齢者に対する印象の変化, 老年看護学, 1 (1) : 63-70.
- 山田紀代美, 西田昭昭 (2007) : 介護スタッフが認知症高齢者に用いるコミュニケーション技法の特徴とその関連要因, 30 (4) : 85-91.
- 吉田正子, 西川千歳, 中野悦子 (1992) : 看護学生の老人イメージに関する研究 (1) —学生の生活背景と老人イメージ—, 神戸市立看護短期大学紀要, 11 : 55-64.